



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に「ファーストクラスの心配り」、「あなたの人格以上は売れない!」(プレジデント社)、「成「幸」学」(講談社)、「出過ぎる杭は打ちにくい!」(サンマーク出版)、「面白くなくちゃ人生じゃない!」(ロングセラーズ)、「小説・球磨川」(上下巻・ワニブックス)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 239

悟りは捨てることから始めよ

伊勢志摩で囲炉裏の獲り立て魚貝を囲んで重要無形民俗文化財、現職の海女さん二人と談笑した。一人は会社勤めをした後に50歳で母の跡を継いで潜り始めた60歳過ぎで、もう一人の20代は夫の漁師になる夢を叶えたいと大阪から夫婦で志摩に移住してきたそうだ。自分も海女になりたいと2年も懇願し続けてもヨソ者の素人娘は相手にされなかったが、熱意がようやく地元で受け入れられて海女になれたという。

海の掟は、海の幸を未来まで絶やさないように素潜り漁に限った。泳ぎが下手でも海底まで潜れば仕事になるが、乱獲防止で午前中は9時から1時間半、午後も1時間半だけの漁と決められている。出来高収入だから一日で100回以上、5mから15mの深さに垂直に潜り、30秒から50秒間も息を止めたままで保護色の獲物を瞬時に探し当て、岩に密着したアワビをノミで掘り起こして急いで頭上の浮き輪目がけて浮上する。水圧で鼓膜をやられるし、命綱が岩に絡まって息絶えて死ぬ者もいるという。魔除けで足ヒレに一筆書きの五角星を描くのは一筆書きで繋ぎ目がないから魔物が侵入できないことと、書き始めの元に無事に帰ってこられるからだそうだ。資源保護で10cm以下の鮑は海へ帰すが、運が良いと午前中1時間半で3万円の稼ぎで、だいたい一日5万円だとか。平均年齢は65歳で“末期”高齢者(⇒光輝交麗者)が多いが、若い頃に女手一人で年収800万円を稼いで旦那に家を建ててあげた海女も多いと豪快に笑う。海女小屋で焚火を囲んで暖を取りながら盛り上がる話題は、旦那の悪口を披露し合うこと。海のオンナは底抜けに明るく、話していて愉快だ。半農半漁で家の田畑で野菜も作り、買うのは肉と調味料ぐらいで、自給自足がほとんどとか。

“磯笛”は楽器ではなく、命にかかわるものだと知った。浮上した瞬間に口をすぼめて呼吸をすると、ピューと口笛が潮騒の波間に漂う哀愁じ

みた音になる。高圧の水中から出る時に、空気中に溶け込んだ窒素が水気泡になって血管に詰まる危険な潜水病を防ぐため、一気に肺を開くのを避けて徐々に息をする、それが口笛に聞こえるのだ。じっと一分近くも息を止めるのさえ難しいのに、腰に重しを巻いて海底で獲物を探して岩から剥がして捕獲し、そして浮き上がってきて息継ぎをし、また海底へ向かう繰り返し……半端ではない重労働だろうに、彼女たちに苦悩の色は見えない。男の海女がいないのは、子を産むオンナにしかない強靱な忍耐力と持続力ゆえなのだろうか。

沖縄へ生まれて初めてのダイビングに出かけた時、船員の30分の長い説明の後、ゴーグルを被ってマウスピースをくわえて顔を沈める練習で、深い闇の海底が広がって足場が無い不安で緊張して船にしがみついた。息を吸うが、タンクから出てくる空気が足りなくて息苦しくなり、マウスピースを外して深呼吸をしなおす連続。「すべてを捨てることから始めてください!」。長い解説より船長の解決の一言にハッと気がついた。息を止めて潜ったことはあっても、水中で呼吸する経験は無かった。そうかあ、“呼吸”とは、吐いてから吸うと書く。水中で大きく息を吐いてみると、ゴボゴボと大きな泡が吹き出る。自然に吸ってみるとボンベの圧力でスーッと新鮮な空気が肺に入ってきた。

猿を捕える罠の一つに、壺がある。中に入れてある餌をつかんだ猿は拳を閉じたまま開こうとしない。拳がつかえて逃げられなくなる形の、ただの壺である。手指を広げて捨てさえすれば逃げられるものを、握った獲物は離さない習性を逆手に取っただけのこと。失うこと、捨てることの難しさは、命ある万物が与えられた永遠の課題か。赤ん坊は何でも人生でつかんでやろう、見てやろうと手をニンギニンギして生まれ、そして人生の終わりには手を開き切る。